

## 5. パーキンソン病患者へのムーブメントプログラムによる即時効果

○山下 哲平, 坪田 憲明 (兵庫県立リハビリテーション西播磨病院)  
紙屋 克子 (京都看護大学)

### I. はじめに

パーキンソン病 (PD) は、診断技術の向上などにより経年的に増加している神経難病である。ムーブメントプログラムは、意識障害・廃用症候群患者を対象とした生活行動回復看護技術のひとつであり<sup>1)</sup>、PD 患者へも効果をあげたという報告がある<sup>2)</sup>。しかしながら、PD 症例での即時効果についての報告はまだない。今回、入院中の PD 患者 6 名へムーブメントプログラムが及ぼす即時効果について検証したので報告する。

### II. 研究方法

対象は入院中の PD 患者 6 名で、重症度分類はいずれも Hoehn & Yahr III とした。属性は、男性 4 名、女性 2 名、年齢  $67.5 \pm 2.7$  歳、身長  $153.4 \pm 8$ cm、体重  $52.2 \pm 6.9$ kg、BMI  $22 \pm 1.9$ 、MMSE  $29 \pm 1.8$ 。方法は対象へムーブメントプログラムを実施し、介入直前と直後で timed up & go test (TUG) にて評価した。差異は Wilcoxon 検定にて検討した。プログラムの内容は、対象の身体に応じて 20～40%の空気を抜いたバランスボールを用いて、仰臥位で膝下にボールを入れて膝関節の屈伸運動、体幹ひねり運動、股関節屈伸運動、長座位と胡坐座位でボールを抱えて前屈運動、端座位でボールの上で足踏みといった運動を中心に 20 分実施した。倫理的配慮として、研究の主旨を明記した文書にて説明を行い、同意書にて承諾を得て実施した。本研究は兵庫県立リハビリテーション西播磨病院倫理委員会の承認を得て行った。

### III. 結果

TUG について、介入前  $9.1 \pm 2.2$  秒、介入後  $8.5 \pm 1.5$  秒であり、介入前後について有意差が認められた ( $p=0.028$ )。

### IV. 結論

PD 患者へのムーブメントプログラムによる即時効果はみられた。先行研究においても、運動介入による即時効果があったという報告はあり、今回も同様の結果が得られた。しかしながら、看護師主体とした運動介入による効果を示したことの意義は大きく、入院中の PD 患者はもとより PD の在宅療養者への看護や、生活指導へも役立つ資料となる。今後、即時効果だけでなく長期的な介入による効果も合わせて検証していきたい。

### V. 文献

- 1) 渡邊江身子, 紙屋克子: 施設入居高齢者の関節拘縮改善と自力座位をめざした研究 用手微振動ならびにムーブメントプログラムの実践, 京都中央看護保健大学校紀要, 19: 17-24, 2012
- 2) 富安眞理, 紙屋克子, 森本智子, 他: パーキンソン病患者を中心としたムーブメントプログラムが在宅療養生活に及ぼす影響, せいいい看護学会誌, 3: 16, 2013